



エッセイ

人が働く七つの理由

松村 真

発行日

2005.6.6.

もう大分前のことになりますが、2才年上の友人が定年退職を控えて悶々としていました。働き続けたいのに適当な仕事が見つからないのです。私は居酒屋で彼の話聞きながら、いろいろと考えられる助言をしようとしていました。人事部がそうした斡旋もするので相談してみることを薦めたら、人事部にも在籍したこともある彼は、いかにも仕事が欲しそうに見られるから嫌だと言います。そこで彼の専門分野で人を探している海外プロジェクトグループに紹介しようとしたら、英語は苦手だから嫌だと言います。そのほかにも考えられる助言や紹介を何度も試みたのですが、「その仕事は向きそうもないから気が進まない」とか、「経験がないから難しい」など、そのたびに理由をつけて行動しようとしません。そのため私は彼と話すうちに苛立ちを覚えるようになり、本音は働きたくないのではないかと疑問を感じ始めていました。というのも、彼は住宅ローンを払い終えているし、上のお子さんは社会人になって自立しています。下のお子さんは学生ですが、あと1年で卒業です。しかも奥さんは薬剤師で、3人の従業員がいる薬局の運営を任されており、安定した収入も確保されているからです。

そこで次に彼と居酒屋で飲んだときに、「働きたいというけれど、どうして働きたいの」と聞いてみました。理屈から考えれば、定年に達するということは、「長い間のお仕事ご苦労様でした。もう働かなくてもいいですよ。これからは年金を支給します。」と社会が認めたことにほかならないからです。ですから欧米のビジネスマンは定年退職の日を晴れやかな顔で迎え、花束で飾られたパーティーでリタイア後の新しい生活を熱っぽく語ります。一方、日本では定年退職を前に再就職先を懸命に探し、見つからないと退職の日を失業の日のように後ろめたい顔で迎えます。欧米と日本では、定年退職になぜこれほどの大きな意識の差があるのでしょうか。そんなわけで彼への質問は、実は2年後に定年を迎える自分への質問でもあり、また同じような状況の大勢のサラリーマンへの質問でもありました。

この質問への彼の最初の答は、やはり収入を得たいというものでした。でもなぜ収入を得たいのか聞いてみると、それほど収入が必要なわけではなく、家でぶらぶらしていると健康によくないと言うのです。そこで健康のためならフィットネスクラブに入ればいいではないかと言うと、それだけではつまらないと言います。要するに彼が働きたい理由は一つではなく、「収入」と「健康」プラス「何か」なのです。私は定年を過ぎても働くなら、目的や理由をもっと明確にした方がよいと思います。なぜなら目的や理由に合った仕事と働き方を選ばないと、残る貴

重な時間を効率よく使えないからです。でも彼のように働く理由は一つとは限りません。そこで次の①から⑥の6つの理由を考え、同じ世代の別の仲間に意見を聞いてみました。

- ① 自己実現のために働く。 ② 社会貢献のために働く。 ③ お金のために働く。
- ④ 健康のために働く。 ⑤ ほかにやることがないから働く。
- ⑥ 家に居づらいから働く。 ⑦ (後で追加します)。

著名な芸術家や小説家は十分に資産を蓄えても働き続けますが、その理由は1番目の自己実現にあるのだろうと私は思います。発明家や宗教家も同じ理由ではないでしょうか。2番目の社会貢献のために働くのは、男性よりも時間にゆとりがある中高年の女性に多いように思います。彼女たちは、健康なうちは社会の役に立ちたいという純粋な理由からボランティア活動に参加しています。3番目の収入のためという理由に説明はいらないでしょう。4番目の健康のためというのもよく聞きます。たしかに外で働くには規則的な生活が必要で、通勤はそれだけで1日数千歩は歩くことになります。一方、1日家にいると千歩も歩きませんから、健康のためというのも一つの理由になると思います。外で働かなくても毎日散歩でもすればよいのですが、私は目標もなしに数千歩も散歩する気がしません。5番目のほかにやることがないという理由は、言い換えれば暇つぶしのためです。サラリーマンは40年近く組織によって決められた仕事をしてきますから、退職後にそれに代わる活動対象を容易に見つけられなくても不思議ではありません。

6番目の家に居づらいからという理由は、少し切ない状況ですが身に覚えがある人が少なくないようです。サラリーマンは家族のために働き蜂になって、約40年も会社で懸命に働いてきます。でもその間に、家の中は奥さんがすべてを支配する世界になっているのです。ですから多くの奥さんは、この家は私が支配する「私の家」だと思っており、本音では「あなたと私の家」とは思いたくないのです。だからこそ在宅亭主にあれこれ言われたくないし、家の中のことは要求など聞きたくないのです。せっかく大事にしてきた自分のコミュニティーには立ち入って欲しくないし、自分の行動も詮索されたくないのです。部下になるなら許せるかもしれませんが、自分と対等かそれ以上の支配権を主張する在宅亭主は「うざい」存在なのです。勝手な言い分とは思いますが、「亭主は元気で留守がよい」という本音があると思って間違いないでしょう。

この話題を居酒屋で話していたら、店のおかみさんが興味をもって口をだしてきました。そしてこう言うのです。「あなたたち、どうして奥さんが在宅亭主を嫌うかわかっている？ だってそうでしょう。これまでお昼ごはんは自分の分だけ簡単に作り、好きなように好きな時間に食べていたのに、これから亭主のために毎日お昼ごはんを作らなければならないのよ。在宅亭主ならお昼ごはんぐらい自

分でなんとかしなきゃ嫌われるに決まっているでしょう」。これを聞いて私はもっともな意見だと思うのですが、かといって奥さんが家にいるのにキッチンに立って昼食を作れるでしょうか。でも少なくとも奥さんが不在なら、自分で昼食を作れる程度の能力は必要でしょう。

さて、次の課題はこの 6 つの理由のうち、自分が働くのはどの理由が該当し、複数ならそれぞれの理由がどの程度の「重さ」なのかということになります。そこで次の会合までに、各自が自分の働く理由を選んで 10 点満点で重み付けを試みることにしました。それから 1 ヶ月を過ぎた次の会合の日、それぞれ働く理由を選んできたのですが予期しない問題が顕在化しました。「松村さん、この 6 つの理由だけでは不十分で 10 点にできない」というのです。よく聞いてみると、「仲間が欲しいから働く」という理由もあるというのです。言い換えれば「群れに入っていたいから働く」ことになります。この理由は現役で忙しく働いていると気がつきにくいのですが、定年退職して家にいる人は気がつくと思います。

日本の企業組織は仕事の「場」を提供するだけでなく、同時に「コミュニティ」を提供しており、サラリーマンには会社に代わるコミュニティがないといわれてよいでしょう。現役の間は飲みに行くのも、ゴルフ仲間もほとんど会社の仲間です。ですから定年退職するということは職場から離れるだけでなく、所属していたコミュニティからも離れることになるので、飲み仲間もゴルフ仲間も同時に失ってしまうのです。コミュニティは中にいると空気のように希薄な存在です。でもコミュニティという共同体帰属意識は、孤独を回避する重要な役割を果たしているのだと思います。孤立や孤独が苦痛になることは、子供のいじめが仲間からの「シカト」にあることから理解できます。子供はシカトされても我慢して学校に行きますが、それは学校というコミュニティのほかに孤独から逃れる方法がないことを知っているからです。子供と違って定年退職世代は、職場を離れても家族や友人関係のコミュニティがあります。でもカルチャーセンターや英会話教室に通い始める人は、知識や技能の習得だけが目的ではなく、会社に代わる新たなコミュニティを求めているようにも思えます。そんなわけで 7 番目に「仲間が欲しいから働く」という理由を追加して、人が働く七つの理由としました。関心のある方は、自分の働く理由を当てはめて重みをつけてみませんか。なお、今後の企業は個人の職能を強く求めるので共同体機能が低下し、その結果、地域に会社に代わるコミュニティが発達する可能性があると思います。ちなみに、職を求めていた友人は専業主夫になり、家中の掃除から食事の支度まで家事全般を喜々としてこなしています。ところで、働く理由を明確に意識することは定年退職者だけでなく、現役世代にとっても大事なことではないでしょうか。そして現状が希望する姿から乖離していたら、素早く軌道修正するのが望ましいでしょう。残る期間をなるべく有意義に過ごすために。

(おわり)